

4. 歴史上からみた清原氏と飛山城跡について

芳賀（清原）氏は天武天皇の流れをくむ名門であったが、芳賀高澄の子高重は花山法皇の怒りにふれ、985年（寛和元）下野に配流され、芳賀郡大内庄（真岡市京泉）に居住した。ここは本田屋敷とよばれ、かつては二重の堀がめぐっていたが、今は整地され残っていない。

高親のとき宇都宮宗綱（宇都宮2代城主）の家臣となり、文治年間（1185～89年）真岡の御前原一五行川東岸で式内社大前神社の南方一に築城し、奥州にも出陣して戦功があった。1577年（天正5）高継のとき真岡・台町に新たに築城しここに移った。これが芳賀城で城主累代の墓は近くの海潮寺にある。

一方、芳賀高俊は永仁年間（1293～99年）竹下に飛山城を築き姓を清原氏と改めた。清原氏は益子氏（紀氏）とともに紀清両党とよばれ、宇都宮氏の支族でよく主家を援け、宇都宮氏のあるところに必ず両党があった。宇都宮氏の活躍はこの両党に負うところが大きく、宇都宮氏の両翼としての戦功は著しいものがあった。

飛山城には清原氏が代々居城していたが、1539年（天文8）高経はひそかに北条氏に通じたため、宇都宮尚綱（20代城主）によって攻め討たれた。高経の子高照は奥州白河に敗走したが、1549年（天文18）早乙女坂合戦には那須高資に投じて尚綱を討った。しかし、高照は芳賀氏を継いだ高定によって誘殺され、飛山城は高定の子高継が城主となった。高継には子がいなかったから、宇都宮広綱（21代城主）の三男高武を養子として家督を継がせた。

小田原征伐ののち、豊臣秀吉の斡旋によって宇都宮国綱（22代城主）養子に、浅野長政の子長重が内定すると、高武は自分が国綱の弟であることを理由に反対し紛争を起こした。このため国綱は浅野長政から恨みをうけ「宇都宮氏の所領に不正がある」と訴えられ、検地の結果、宇都宮氏の所領18万石が実際には39万石余あったから、1597年（慶長2）秀吉の命によって、宇都宮氏の所領はことごとく没収され、宇都宮氏の滅亡とともに、飛山城、芳賀城は廃城となった。こうして飛山城は高俊によって築城されてから約300年間の歴史を閉じた。

国指定となった飛山城は、鬼怒川左岸の台地上に築城されたものであるが、土塁、空堀が二重に設けられ、いま判然としている。外堀と内堀は東と南側に掘られ、西と北側は鬼怒川とその支流によって急な断崖をなすため堀を必要としない。城の規模は外堀から推定し、東西約330メートル、南北約450メートルに及ぶものであるが、不整形な長方形を呈しているため、この数値は凡そのものである。

南側の外堀に面した中ほどに1か所、東南隅に1か所、東側に2か所の計4か所に「物見櫓」が設けられたと推定される突出部がある。南側中ほどのものが最もみごとな突出部である。南と

東側は平坦地であってみれば「物見櫓」は防御上是非必要なものであったろう。

内堀は外堀と同様にかかなり堅固なものであり、城跡北東部の調査結果によっても判るように、内堀の深さは約 6.5メートルを記録し、堀の両側に構築された土塁の最上端部幅（第2土塁と第3土塁との幅）は17メートルである。外堀の深さ、最上端部幅は未調査のため不明であるがこの内堀の規模を上回ることはいうまでもない。また興味深いことは内堀には南側に3か所、東側に4か所の土橋があることである。特にもと館神社があったという東側北半にある土橋は最も立派なものであり、東側畑の中に残る古道（今は農道）に連絡していることである。この古道は清原氏の菩提所である同慶寺に至るものである。城郭の内部の中ほどには東西に「┐」形の堀があり、この堀によって第二郭と第三郭とを区画している。またこの堀にも土橋が4か所設けられている。

『月刊文化財』（昭和51年12月号）によれば「北西側を主郭とし、以下第二郭、第三郭が南北に連なり、各郭は土塁と空堀で区画されている。東側の第二郭と第三郭の接続部に虎口を開いている。ここが大手であり、第三郭の南西隅が搦手であったと考えられる」という。

ここで清原氏の菩提所である同慶寺について触れなければならない。

竹下町金剛林にある臨済宗妙心寺派の末寺であり、芳賀郡中第1の巨刹であった同慶寺は、仏国国師第三の法嗣である大同妙哲禅師の開山である。永仁年間（1293～99年）に芳賀左兵衛尉清原高俊が飛山城を築くと、高俊は子孫長久のため伽藍を建立したのがその起源である。高俊は1298年（永仁6）没すると、法名を同慶寺殿養徳院左兵衛尉高俊雄山宗泰大居士と称した。このため菩提所を同慶寺に定め、瑞龍山養徳院同慶寺と改称した。

寺領は広大で七堂伽藍の備わった壮大な霊場であったが、永禄年間（1558～70年）に炎上した。寺はその後荒廃したが、清原高武によって再建され旧に復した。だが1597年（慶長2）宇都宮氏一門の没落とともに衰退し、明治12年に再び炎上し多くの古記録を焼失した。

同慶寺は他の寺院とは異なり、本来の寺院としての性格のほかに飛山城の支城としての機能を果たした観がある。つまり内城、外堀より成り、内城だけでも20町歩に及んでいた。これに二重の堀がめぐり、その外に空堀や勅使門も認められる。その門跡近くにある井戸は飛山城に通ずるという伝説がある。伝説は所詮伝説であるが、同慶寺が牙城である飛山城とは分離できない関係にあったことを示すものとして注目しなければならない。寺内には飛山城、同慶寺を築いた高俊以下の墓（清原氏累代の墓碑14基）があり、五輪塔は原形を保っているとはいえないが、宇都宮市指定の文化財となっている。（埴）